

第3章 小学部

I 結果と考察

1. 教員に関する内容

1) 単純回答

①教員歴

調査対象となった教員は計259名であり、教員歴（教育経験）の平均は15.8年（範囲：0年～40年、中央値：13.5年、標準偏差：11.0年）であった（表3-1）。なお、無回答が1名いた。

表3-1 回答者の年齢構成：人

年齢	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳以上	計
人数	57	63	75	46	17	258

②指導歴

聴覚障害児に対する指導歴の平均は9.7年（範囲：0年～39年、中央値：7年、標準偏差：8.7年）であった。その内訳を見ると、特別支援学校（聴覚障害）における指導歴の平均が9.3年（範囲：0年～39年、中央値：6年、標準偏差：8.5年）であり、特別支援学校（聴覚障害以外の障害種）での指導歴の平均が4.4年（範囲：0年～36年、中央値：1.0年、標準偏差：6.3年）、特別支援学級（難聴）もしくは通級指導教室（難聴）での指導歴の平均が0.4年（範囲：0年～16年、中央値：0年、標準偏差：1.7年）、通常学級での指導歴の平均が1.2年（範囲：0年～20年、中央値：0年、標準偏差：3.5年）となっていた（表3-2）。

表3-2 回答者の指導歴：人

教員・指導歴別にみた教員の内訳	5年 以下	6～ 10年	11～ 15年	16～ 20年	21～ 25年	26～ 30年	31年 以上	計	平均 年数(年)
教員歴	56	49	42	32	18	26	35	258	15.8
聴覚障害児に対する指導歴	110	60	29	28	11	7	12	257	9.7
特別支援学校(聴覚障害)での指導歴	116	60	31	24	10	7	10	258	9.3
特別支援学校(聴覚障害以外)での指導歴	178	30	26	11	6	0	1	252	4.4
特別支援学級(難聴)もしくは通級指導教室(難聴)での指導歴	245	3	1	1	0	0	0	250	0.4
通常学級での指導歴	234	5	4	6	0	0	0	249	1.2

③担当児童数

担当する児童数の平均は3.5人（標準偏差：4.2人）であった。そのうち、人工内耳を装着している児童数は1.8人（標準偏差：1.7人）であった。

④医療機関との連携の有無

人工内耳装着児童に関する医療機関との連携については、連携があると答えた者が258名中147名（57.0%）、連携がないと答えた者が258名中109名（42.2%）であった（図3-1）。

2) 記述式

①医療機関との連携の内容（自由記述）

医療機関との連携があると答えた147名には、複数の連携の内容が挙げられている場合があり、のべ188件挙げられた。具体的には、「保護者を通じての情報共有」が80件（54.4%）と最も多く、次いで、「医療機関との直接の情報交換」が52件（35.4%）、「通院に教員が同行する、保護者向け研修会に参加する」が15件（10.2%）となっていた。その他に、「STや医師の来校」が13件（8.8%）、「情報交換会の開催」が4件（2.7%）、「その他」が24件（16.3%）であった。なお、「その他」については、重複する障害に関する事項あるいは医療的ケアに関する事項などであった。

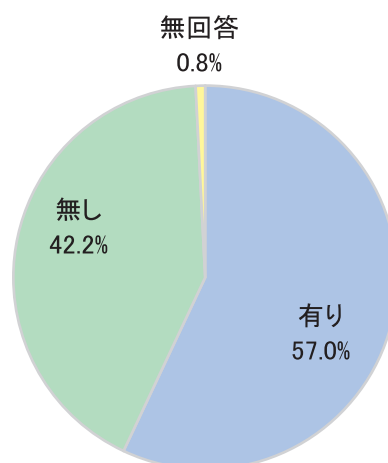


図3-1 医療機関との連携

②指導上の課題（自由記述）

補聴器装用児童と比較した際に、人工内耳装用児童に対する指導上で課題として感じている事項については、168件の回答が得られた。その内訳は、「コミュニケーション」に関する回答が最も多く（45件：26.8%）、次いで「言語力」（34件：20.2%）、「聴覚活用」（21件：12.5%）、「障害理解」（19件：11.3%）、「発音・発語」（11件：6.5%）、「教科学習」（8件：4.8%）、「その他」（30件：17.9%）となっていた。

指導上困難な事柄として「コミュニケーション」が多く挙げられていたが、これは、ある程度の「聴覚活用」が可能であるために、かえって話者の顔（口元）を見ようとするなど、傾聴態度が育っていないとの回答が目立った。このことは、これまでの聴覚障害教育において培ってきた基本が、人工内耳装用児童では十分に身に付いていない事例が多く存在することを示唆するものであった。

③指導上の工夫点（自由記述）

人工内耳装用児童に対して指導を行う際に工夫している点については、203件の回答が得られた。ここでも「コミュニケーション」に関する回答が最も多く（64件：31.5%）、次いで「聴覚活用」（47件：23.2%）、「言語力」（35件：17.2%）、「発音・発語指導」（24件：11.8%）、「障害理解」（9件：4.4%）、「教科学習」（3件：1.5%）、「その他」（21件：10.3%）と続いていた。

「コミュニケーション」に関する項目が最も多く見られたが、これは、指導上の課題で挙げられていた内容と同様に、人工内耳装用児童が自身の聞こえについて十分に理解しておらず、話者の顔（口元）を見ようとするなど、傾聴態度が育っていないために重点的に指導を行っていると考えられる。

④補聴器装用児童との指導上の違い（自由記述）

補聴器装用児童と比較した際に、人工内耳装用児童に対して指導しやすい点については、229件の回答が得られた。その内訳は、「聴覚活用」が120件（52.4%）と最も多く、次いで「コミュニケーション」（48件：21.0%）、「発音・発語指導」（21件：9.2%）、「言語力」（21件：9.2%）、

「教科学習」(13件：5.7%)、「障害理解」(0件)、「その他」(6件：2.6%)の順であった。

指導しやすい点については、「聴覚活用」が過半数を占めており、そのことにより、「コミュニケーションが円滑である」あるいは「発音・発語指導」、「言語指導」、「教科学習」が指導しやすいと回答されたものと推察された。

⑤学習したい研修内容(自由記述)

教員が学習したい研修内容については、242件の回答があった。そのうち、「人工内耳に関する基礎的な研修」が139件(57.4%)と最も多く、「人工内耳装用児童に対する指導・支援に関する内容」が55件(22.7%)、「人工内耳装用児童の発達に関する内容」が15件(6.2%)、「その他」の内容についての回答が33件(13.6%)あった。

「人工内耳に関する基礎的な研修」については、聴覚の解剖生理学や人工内耳の仕組みそのものについて、さらには日々の使用にあたっての留意点等が挙げられた。次に、「人工内耳装用児童に対する指導・支援に関する内容」については、聴覚活用の方法、発音指導、言語指導、教科指導などが挙げられた。また、「人工内耳装用児童の発達に関する内容」については、人工内耳装用児童の認知発達や言語発達の特徴について挙げられた。最後に、「その他」については、人工内耳に係る福祉的な配慮、手続きについて、人工内耳装用者の就労、人工内耳装用者の体験談などが挙げられた。

2. 児童に関する内容

1) 単純回答と記述式

①学年

教員により回答のあった児童の人数は458名(1年生：93名、2年生：77名、3年生：69名、4年生：76名、5年生：69名、6年生：73名、不明：1名)であった。

②診断時年齢

聴覚障害診断時の年齢については、1歳未満が186名(40.6%)、1歳台が62名(13.5%)、2歳台が56名(12.2%)、3歳台が22名(4.8%)、4歳台が2名(0.4%)、5歳～9歳台で3名(0.7%)であり、10歳以上で診断を受けた児童はいなかった。なお、無回答は127名(27.7%)であった。

③人工内耳装用状態

人工内耳の装用については、両耳装用の児童が148名(32.3%)であり、片耳装用が307名(67.0%)であった。なお、装用状態について無回答が3件あった。また、片耳装用の児童については、右耳装用が195名(42.6%)、左耳装用が112名(24.5%)であり(図3-2)、人工内耳を装用しない耳に補聴機器を装用している児童が254名(82.7%)、補聴機器を装用していない児童が51名(16.6%)、無回答が2名(0.7%)であった。

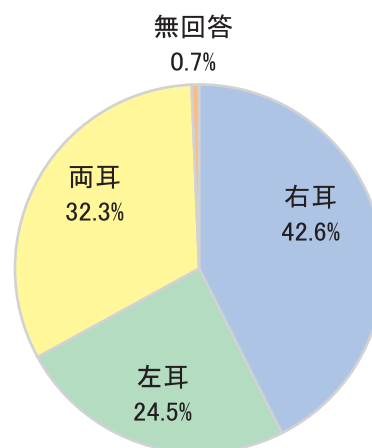


図3-2 人工内耳装用状態

④人工内耳装用開始時期

人工内耳の装用開始時期については、1歳未満が6名（1.3%）、1歳台が79名（17.2%）、2歳台が126名（27.5%）、3歳台が84名（18.3%）、4歳台が46名（10.0%）、5歳～9歳台が41名（9.0%）、10歳以上が6名（1.3%）であった。なお、無回答は70名（15.3%）であった。

⑤手術前の平均聴力レベル

人工内耳装用前の裸耳平均聴力レベルの平均は、右耳では102.8dB（標準偏差：12.5dB）であり、左耳では102.8dB（標準偏差：14.4dB）であった。

⑥現在の平均聴力レベル

担当する児童の現在の補聴器等装用閾値の平均は、右耳で35.4dB（標準偏差：18.6dB）、左耳で41.2dB（標準偏差：21.5dB）であった。

なお、人工内耳を装用していない耳に補聴機器を装用していない児童が51名いた。このうち、回答のあった30名の補聴機器を装用していない方の耳の平均聴力レベルの平均は112.8dB（標準偏差：13.2dB）であった。

⑦重複障害の種類（複数回答可）

担当する児童の重複障害の有無については、「重複なし」の児童が334名（72.9%）、「重複あり」の児童が115名（25.1%）、無回答9名（2.0%）であった（図3-3）。

このうち、「重複あり」の児童について見ると、知的障害との重複の児童が87名（75.7%）、肢体不自由との重複の児童が7名（6.1%）、視覚障害との重複の児童が6名（5.2%）、病弱・身体虚弱との重複の児童が5名（4.3%）、その他の障害との重複の児童が30名（26.1%）であった。その他の障害については、発達障害が17名の他、症候群性の難聴に関連するものが挙げられた。なお、聴覚障害以外に複数の障害を重複する場合があるため、いずれもの件数を表す。

⑧普段使用しているコミュニケーションモード（複数回答可）

普段使用しているコミュニケーションモードについて、複数回答可の形式で求めたところ、「重複なし」の児童の場合、音声315名（94.3%）、手話が270名（80.8%）、指文字が231名（69.2%）、読話が103名（30.8%）、キューサインが46名（13.8%）、筆談が26名（7.8%）、その他が35名（10.5%）となっていた。一方、「重複あり」の児童の場合、手話が105名（91.3%）、音声87名（75.7%）

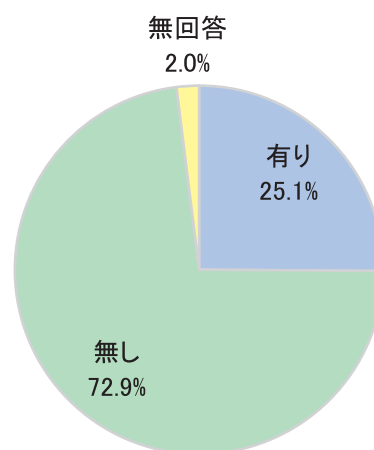


図3-3 重複する障害の有無

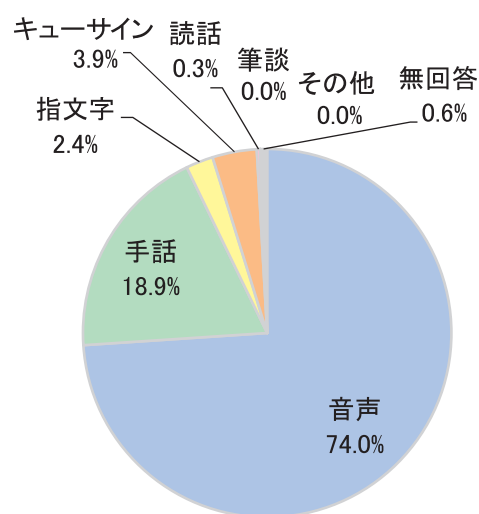


図3-4 学習時に用いる主たるコミュニケーションモード（「重複なし」）

%)、指文字が82名 (71.3%)、読話が15名 (13.0%)、筆談が15名 (13.0%)、キューサインが11名 (9.6%)、その他が27名 (23.5%) であった。

次に、学校での学習時に最も多く用いるコミュニケーションモードについて尋ねたところ、「重複なし」の児童の場合、音声で247名 (74.0%)、手話が63名 (18.9%)、キューサインが13名 (3.9%)、指文字が8名 (2.4%)、読話が1名 (0.3%)、筆談が0名、その他が0名であった (図3-4)。

一方、「重複あり」の児童の場合、音声で53名 (46.1%)、手話が45名 (39.1%)、指文字が5名 (4.3%)、キューサインが4名 (3.5%)、読話が0名、筆談が0名、その他が8名 (7.0%) であった (図3-5)。

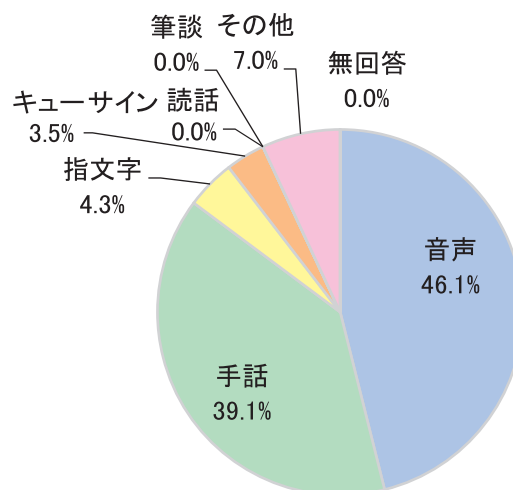


図3-5 学習時に用いる主たるコミュニケーションモード (「重複あり」)

また、学校の学習時に2番目に多く用いるコミュニケーションモードについては、「重複なし」の児童では、手話が166名 (49.7%)、音声で49名 (14.7%)、指文字が49名 (14.7%)、キューサインが23名 (6.9%)、読話が20名 (6.0%)、筆談が5名 (1.5%)、その他が18名 (5.4%) となっていた。一方、「重複あり」の児童の場合、手話が51名 (44.3%)、指文字が27名 (23.5%)、音声で25名 (21.7%)、キューサインが5名 (4.3%)、読話が1名 (0.9%)、筆談が0名、その他が5名 (4.3%) であった。

⑨家族構成 (きょうだい・近親者)

聴覚障害児童の家族構成等については、「重複なし」の児童の場合、きょうだい児がいる児童は272名 (81.4%)、きょうだい児がいない児童が54名 (16.2%)、無回答8名 (2.4%) であった。一方、「重複あり」の児童の場合、きょうだい児がいる児童は81名 (70.4%)、きょうだい児がいない児童が29名 (25.2%)、無回答5名 (4.3%) であった。

次に、近親者における聴覚障害者の有無については、「重複なし」の児童では、近親者に聴覚障害者のいる児童が59名 (17.7%)、近親者に聴覚障害者のいない児童が258名 (77.2%)、無回答17名 (5.1%) であった。一方、「重複あり」の児童の場合、近親者に聴覚障害者のいる児童が13名 (11.3%)、近親者に聴覚障害者のいない児童が95名 (82.6%)、無回答7名 (6.1%) であった。

⑩学校歴 (現在まで) (複数回答可)

評価の対象となった人工内耳装用児童における、これまでの学校歴について、乳児期、幼児期の2期に分けて示す。なお、いずれの時期も複数利用を含む回答であるため、のべ人数を表している。

まず、乳児期においては、「重複なし」の児童では、特別支援学校 (聴覚障害) に通っていた児童が196名 (58.7%)、児童発達支援センター (難聴幼児通園施設) に通っていた児童が54名 (16.2%)、その他の施設に通っていた児童が53名 (15.9%) であった (図3-6)。他方、「重複あり」の児童においては、特別支援学校 (聴覚障害) に通っていた児童が60名 (52.2%)、

児童発達支援センター（難聴幼児通園施設）に通っていた児童が27名（23.5%）、その他の施設に通っていた児童が20名（17.4%）、無回答2名（1.7%）であった（図3-7）。

次に、幼児期においては、「重複なし」の児童では特別支援学校（聴覚障害）幼稚園に通っていた児童が295名（88.3%）、幼稚園に通っていた児童が30名（9.0%）、保育所に通っていた児童が28名（8.4%）、児童発達支援センター（難聴幼児通園施設）に通っていた児童が25名（7.5%）、その他の施設に通っていた児童が9名（2.7%）であった（図3-6）。他方、「重複あり」の児童では、特別支援学校（聴覚障害）幼稚園に通っていた児童が96名（83.5%）、幼稚園に通っていた児童が5名（4.3%）、保育所に通っていた児童が13名（11.3%）、児童発達支援センター（難聴幼児通園施設）に通っていた児童が13名（11.3%）、その他の施設に通っていた児童が12名（10.4%）、無回答2名（1.7%）であった（図3-7）。

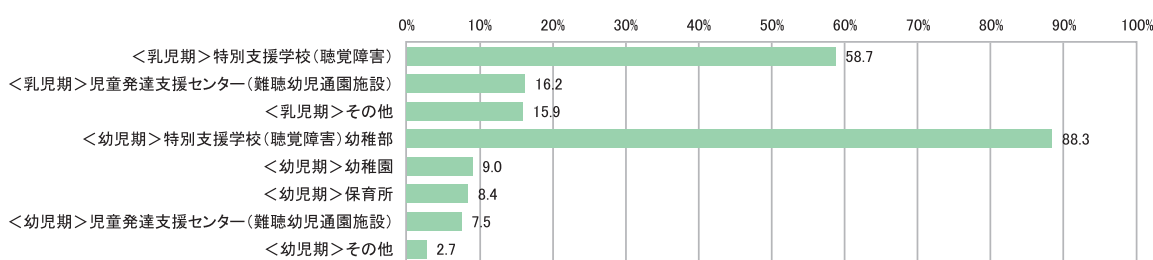


図3-6 学校歴（重複なし）

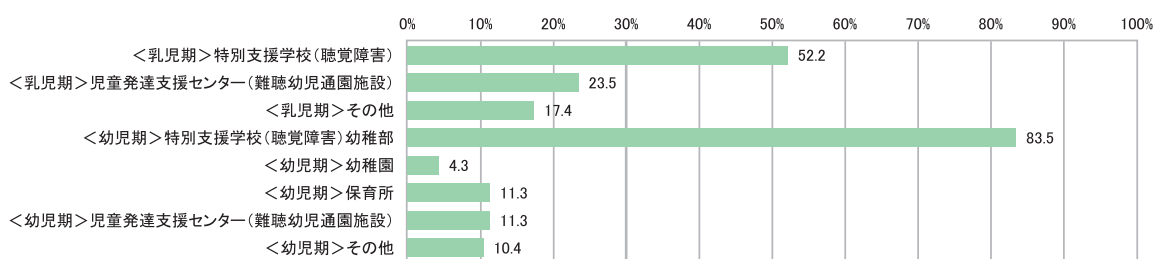


図3-7 学校歴（重複あり）

⑪今後の進路（複数回答可）

特別支援学校（聴覚障害）小学部卒業後の進路希望については、中学校段階、高等学校段階の2つの段階に分けて示す。なお、高等学校段階については、無回答の割合が6割～8割と高いため、「重複なし」の児童、「重複あり」の児童の結果を合わせて示す。

まず、聴覚障害児の中学校段階での進路希望については、「重複なし」の児童では、特別支援学校（聴覚障害）中学部に進学希望の児童が238名（71.3%）、中学校（通常学級）に進学希望の児童が15名（4.5%）、中学校（特別支援学級（難聴））に進学希望の児童が7名（2.1%）、その他の進学希望の児童が14名（4.2%）、無回答60名（18.0%）であった。一方、「重複あり」の児童においては、特別支援学校（聴覚障害）中学部に進学希望の児童が79名（68.7%）、中学校（通常学級）に進学希望の児童が0名、中学校（特別支援学級（難聴））に進学希望の児童が0名、その他の進学希望の児童が9名（7.8%）、無回答27名（23.5%）であった。

次に、高等学校段階の進路希望については、特別支援学校（聴覚障害）高等部に進学希望の児童が169名（37.6%）、高等学校に進学希望の児童が20名（4.5%）、その他の進学希望の児童

が35名（7.8％）であった。

⑫聴覚活用の状態（表3-3、表3-4）

・音への気付き

音への気付きが「極めて良い」から「良くない」までの5段階で評価すると、「重複なし」の児童の場合、「極めて良い」児童は112名（33.5％）、「良い」児童は165名（49.4％）、「どちらともいえない」児童は30名（9.0％）、「あまり良くない」児童は17名（5.1％）、「良くない」児童は9名（2.7％）、無回答1名（0.3％）であった。一方、「重複あり」の児童では、「極めて良い」児童は20名（17.4％）、「良い」児童は59名（51.3％）、「どちらともいえない」児童は21名（18.3％）、「あまり良くない」児童は8名（7.0％）、「良くない」児童は6名（5.2％）、無回答1名（0.9％）であった。

表3-3 聴覚活用の状態（重複なし）：％

	極めて良い	良い	どちらともいえない	あまり良くない	良くない
音への気付き	33.5	49.4	9.0	5.1	2.7
言語音の聞き取り	14.7	47.0	21.3	11.7	5.1
傾聴態度	18.9	38.6	24.3	15.3	2.4

表3-4 聴覚活用の状態（重複あり）：％

	極めて良い	良い	どちらともいえない	あまり良くない	良くない
音への気付き	17.4	51.3	18.3	7.0	5.2
言語音の聞き取り	5.2	35.7	30.4	12.2	14.8
傾聴態度	4.3	22.6	29.6	33.0	9.6

・言語音の聞き取り

言語音の聞き取りについても、音への気付きと同様の5段階で評価すると、「重複なし」の児童では、「極めて良い」児童は49名（14.7％）、「良い」児童は157名（47.0％）、「どちらともいえない」児童は71名（21.3％）、「あまり良くない」児童は39名（11.7％）、「良くない」児童は17名（5.1％）、無回答1名（0.3％）であった。一方、「重複あり」の児童においては、「極めて良い」児童は6名（5.2％）、「良い」児童は41名（35.7％）、「どちらともいえない」児童は35名（30.4％）、「あまり良くない」児童は14名（12.2％）、「良くない」児童は17名（14.8％）、無回答2名（1.7％）であった。

・傾聴態度

傾聴態度について、「よくできている」から「できていない」までの5段階で評価させたところ、「重複なし」の児童の場合、「よくできている」児童は63名（18.9％）、「できている」児童は129名（38.6％）、「どちらともいえない」児童は81名（24.3％）、「あまりできていない」児童は51名（15.3％）、「できていない」児童は8名（2.4％）であった。

一方、「重複あり」の児童では、「よくできている」児童は5名（4.3％）、「できている」児童は26名（22.6％）、「どちらともいえない」児童は34名（29.6％）、「あまりできていない」児童は

童は38名（33.0%）、「できていない」児童は11名（9.6%）、無回答1名（0.9%）であった。

・聴覚活用に関する現状と課題（自由記述）

聴覚活用に関する現状と課題について、386件の回答があったが、「重複なし」の児童に関する回答が289件、「重複あり」の児童に関する回答が97件であった。

「重複なし」の児童に関する回答のうち、「活用できている」が193件、「活用できていない」が41件であった。このうち、聴覚活用が十分にできている児童の指導上の課題については、「傾聴態度」が48件、「言葉や文での聞き取りの困難」が39件、「年齢相応の語彙力、文法力の育成」が39件、「障害理解」が19件、「課題遂行時の集中力」が14件、「その他」が10件であった。なお、「その他」については、「人工内耳装用に対する不快感が強く、常時装用に結びつかない」、「学校では人工内耳を装用するが、家庭では外すことが多い」など、人工内耳を継続的に利用することの困難が挙げられた。

一方、「重複あり」の児童に関する回答のうち、「活用できている」が72件、「活用できていない」が12件であった。指導上の課題については、重複障害に起因した内容が多く、個別性も高いため、分類が困難であるが、「傾聴態度の育成不十分」、「集中持続の困難」などのキーワードが挙げられた。

人工内耳を装用したことで、生活音等の小さな音に対する気付きは増えており、非言語音や呼びかけの声などが聞こえていることが示された。それにも関わらず、教師の発する単語や文を理解する能力に課題が残るようである。単語や文の理解ができないために、年齢相応の言語力が身に付かない、障害理解が不十分、傾聴態度の育成ができていない、などの様子が見られた。

⑬言語活動（表3-5、表3-6）

言語活動について、以下の4つの項目について、同年齢の健聴児童に比べて「高い」から「低い」までの5段階で評価を行った。

表3-5 言語活動の状態（重複なし）：％

	高い	やや高い	同じくらい	やや低い	低い
文法力	3.6	7.2	16.2	31.4	41.0
文章理解力	4.5	6.9	19.8	29.6	38.6
作文力	3.3	4.5	17.7	32.9	41.3
文章構成力	1.8	5.4	15.3	34.1	43.1

表3-6 言語活動の状態（重複あり）：％

	高い	やや高い	同じくらい	やや低い	低い
文法力	0.9	0.0	4.3	16.5	73.0
文章理解力	0.9	0.0	5.2	13.0	75.7
作文力	0.9	0.0	3.5	12.2	78.3
文章構成力	0.9	0.0	3.5	10.4	80.9

・文法力

文法力については、「重複なし」の児童の場合、「高い」と評価された児童が12名（3.6%）、「やや高い」と評価された児童が24名（7.2%）、「同じくらい」と評価された児童が54名（16.2%）、「やや低い」と評価された児童が105名（31.4%）、「低い」と評価された児童が137名（41.0%）、無回答2名（0.6%）であった。一方、「重複あり」の児童では、「高い」と評価された児童が1名（0.9%）、「やや高い」と評価された児童が0名、「同じくらい」と評価された児童が5名（4.3%）、「やや低い」と評価された児童が19名（16.5%）、「低い」と評価された児童が84名（73.0%）、無回答6名（5.2%）であった。

・文章理解力

文章理解力については、「重複なし」の児童では、「高い」と評価された児童が15名（4.5%）、「やや高い」と評価された児童が23名（6.9%）、「同じくらい」と評価された児童が66名（19.8%）、「やや低い」と評価された児童が99名（29.6%）、「低い」と評価された児童が129名（38.6%）、無回答2名（0.6%）であった。一方、「重複あり」の児童の場合、「高い」と評価された児童が1名（0.9%）、「やや高い」と評価された児童が0名、「同じくらい」と評価された児童が6名（5.2%）、「やや低い」と評価された児童が15名（13.0%）、「低い」と評価された児童が87名（75.7%）、無回答6名（5.2%）であった。

・作文力

作文力については、「重複なし」の児童の場合、「高い」と評価された児童が11名（3.3%）、「やや高い」と評価された児童が15名（4.5%）、「同じくらい」と評価された児童が59名（17.7%）、「やや低い」と評価された児童が110名（32.9%）、「低い」と評価された児童が138名（41.3%）無回答1名（0.3%）であった。「重複あり」の児童では、「高い」と評価された児童が1名（0.9%）、「やや高い」と評価された児童が0名、「同じくらい」と評価された児童が4名（3.5%）、「やや低い」と評価された児童が14名（12.2%）、「低い」と評価された児童が90名（78.3%）、無回答6名（5.2%）であった。

・文章構成力

文章構成力については、「重複なし」の児童の場合、「高い」と評価された児童が6名（1.8%）、「やや高い」と評価された児童が18名（5.4%）、「同じくらい」と評価された児童が51名（15.3%）、「やや低い」と評価された児童が114名（34.1%）、「低い」と評価された児童が144名（43.1%）、無回答1名（0.3%）であった。一方、「重複あり」の児童では、「高い」と評価された児童が1名（0.9%）、「やや高い」と評価された児童が0名、「同じくらい」と評価された児童が4名（3.5%）、「やや低い」と評価された児童が12名（10.4%）、「低い」と評価された児童が93名（80.9%）、無回答5名（4.3%）であった。

・言語活動の指導の現状（自由記述）

言語活動に関する指導の現状と課題について、408件の回答があったが、「重複なし」の児童に関する回答が304件、「重複あり」の児童に関する回答が104件であった。このうち、「重複なし」の児童に関する指導の現状のみを記載した回答2件、「重複あり」の児童に関する指導の現状のみを記載した回答20件、合計22件は分析の対象から除外した。

「重複なし」の児童に関する回答のうち、指導上の課題として挙げられていた項目は「語彙」

が111件と最も多く、次いで「文法」(69件)、「話し言葉から書き言葉への移行」(31件)、「音韻」(18件)、「言語活動に対する意欲」(16件)、「文理解」(15件)、「その他」(42件)であった。最も多く挙げられた「語彙」については、語彙の少なさを指摘する意見が多かったが、小学部6年生の児童で「ネット特有の言葉や表現を使いたがるが、その言葉の認知度までは理解できていない」など、今日的な語彙発達上の問題も示された。

一方、「重複あり」の児童に関する回答のうち、指導上の課題として挙げられていた項目は「語彙」(27件)、「文法」(21件)、「文理解」(11件)、「文字との結びつき」(7件)、「音韻」(2件)、「言語活動に対する意欲」(1件)、「その他」(15件)であった。特に、「文字との結びつき」については、例えば、小学部3年生の児童で「ようやく平仮名を覚え、漢字を学習している段階」といった回答や、小学部6年生の児童で「最近、ほとんどのひらがなを書くことができるようになった」などの回答があり、重複障害に起因する困難さの影響が考えられた。

聴覚活用ができていないことで、聞こえそのものの課題は少なく、「語彙」や「文法」の能力を育成することに課題を感じている場合が多い。また、小学部の低学年段階の児童に関する内容では、書くことに抵抗があること、会話の内容をもとに、まとめの一文を書くことに対する困難さなどが挙げられていた。さらに、「その他」には、話し言葉の面で、会話のルールを身に付けさせたい、書き言葉の拡充として、読み手を意識した文作成ができるようにしたい、などが挙げられていた。

2) 学校での学習と生活

①学業成績

・健聴児と比べた学業成績の程度

同年齢の健聴の児童と比べた場合の学業成績について、「高い」から「低い」までの5段階で評価したところ、「重複なし」の児童の場合、「高い」と評価された児童が14名(4.2%)、「少し高い」と評価された児童が26名(7.8%)、「同じくらい」と評価された児童が93名(27.8%)、「少し低い」と評価された児童が103名(30.8%)、「低い」と評価された児童が96名(28.7%)、無回答2名(0.6%)であった。一方、「重複あり」の児童では、「高い」と評価された児童が1名(0.9%)、「少し高い」と評価された児童が1名(0.9%)、「同じくらい」と評価された児童が3名(2.6%)、「少し低い」と評価された児童が20名(17.4%)、「低い」と評価された児童が81名(70.4%)、無回答9名(7.8%)であった。

・潜在力と比べた学業成績の程度

聴覚障害児本人の潜在的な学習能力や知的能力に比べた場合の現在の学業成績について、「同じくらい」から「比較できないほど低い」までの5段階で評価したところ、「重複なし」の児童の場合、「同じくらい」と評価された児童が120名(35.9%)、「やや低い」と評価された児童が84名(25.1%)、「低い」と評価された児童が80名(24.0%)、「かなり低い」と評価された児童が37名(11.1%)、「比較できないほど低い」と評価された児童が8名(2.4%)、無回答5名(1.5%)であった。一方、「重複あり」の児童においては、「同じくらい」と評価された児童が34名(29.6%)、「やや低い」と評価された児童が20名(17.4%)、「低い」と評価された児童が20名(17.4%)、「かなり低い」と評価された児童が18名(15.7%)、「比較できないほど低い」と評価された児童が14名(12.2%)、無回答9名(7.8%)であった。

・読書力の程度

同年齢の健聴の児童と比べた場合の読書力について、「高い」から「低い」までの5段階で評価したところ、「重複なし」の児童の場合、「高い」と評価された児童が15名（4.5%）、「少し高い」と評価された児童が30名（9.0%）、「同じくらい」と評価された児童が55名（16.5%）、「少し低い」と評価された児童が101名（30.2%）、「低い」と評価された児童が131名（39.2%）、無回答2名（0.6%）であった。一方、「重複あり」の児童では、「高い」と評価された児童が1名（0.9%）、「少し高い」と評価された児童が1名（0.9%）、「同じくらい」と評価された児童が1名（0.9%）、「少し低い」と評価された児童が18名（15.7%）、「低い」と評価された児童が84名（73.0%）、無回答10名（8.7%）であった。

・学習指導の現状と課題（自由記述）

学業成績に関する上記3項目において、同年齢の健聴の児童と比較して、おおむね良好である（10点以上）と評価された児童は111名（「重複なし」の児童105名、「重複あり」の児童5名、重複する障害の有無が未記載の回答1名）、課題がある（9点以下）と評価された児童は328名（「重複なし」の児童222名、「重複あり」の児童99名、重複する障害の有無が未記載の回答7名）であった（図3-8、図3-9）。課題があると指摘された児童のうち、自由記述での回答があったのは、「重複なし」の児童に関する回答が206件、「重複あり」の児童に関する回答が96件であった。

「重複なし」の児童に関する回答のうち、聴覚障害に起因する困難として考えられた項目として、語彙力の低さに伴う学習上の困難、また、文法の力の弱さによって、国語の教科学習のみならず、算数の文章題理解や、理科や社会の教科書の読解困難などが挙げられた。

「重複あり」の児童に関する回答には、「知的障害と肢体不自由を重複するため、手話表現も難しい」、「ADHDの特性による集中の持続困難」などの意見が挙げられており、重複する障害に起因する困難もうかがわれた。

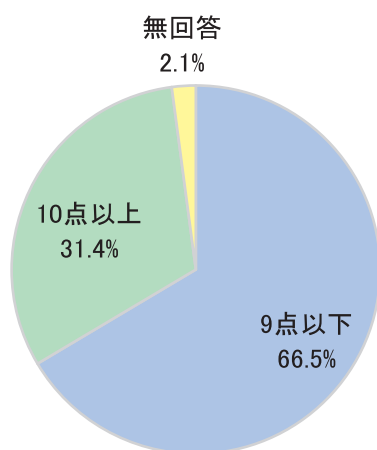


図3-8 学業成績全般の評価（重複なし）

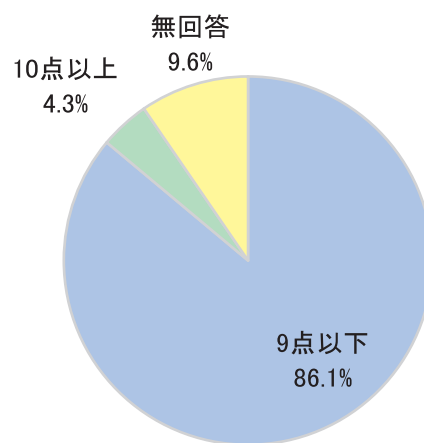


図3-9 学業成績全般の評価（重複あり）

②学習態度

・注意散漫の程度

注意散漫の程度について、同年齢の平均的な健聴の児童と比較して「ほとんどない」から

「多い」までの5段階で評価したところ、「重複なし」の児童では、「ほとんどない」と評価された児童が68名(20.4%)、「少しある」と評価された児童が37名(11.1%)、「同じくらい」と評価された児童が90名(26.9%)、「少し多い」と評価された児童が90名(26.9%)、「多い」と評価された児童が47名(14.1%)、無回答2名(0.6%)であった。一方、「重複あり」の児童では、「ほとんどない」と評価された児童が2名(1.7%)、「少しある」と評価された児童が13名(11.3%)、「同じくらい」と評価された児童が14名(12.2%)、「少し多い」と評価された児童が27名(23.5%)、「多い」と評価された児童が53名(46.1%)、無回答6名(5.2%)であった。

・注意持続時間の程度

注意持続時間の程度について、同年齢の平均的な健聴の児童と比較して「長い」から「短い」までの5段階で評価したところ、「重複なし」の児童では、「長い」と評価された児童が35名(10.5%)、「少し長い」と評価された児童が23名(6.9%)、「同じくらい」と評価された児童が134名(40.1%)、「少し短い」と評価された児童が94名(28.1%)、「短い」と評価された児童が46名(13.8%)、無回答2名(0.6%)であった。一方、「重複あり」の児童の場合、「長い」と評価された児童が0名、「少し長い」と評価された児童が1名(0.9%)、「同じくらい」と評価された児童が16名(13.9%)、「少し短い」と評価された児童が42名(36.5%)、「短い」と評価された児童が52名(45.2%)、無回答4名(3.5%)であった。

・口頭による指示に対する反応

口頭による指示に対して戸惑いを示したり躊躇したりするかについて、「ない」から「多い」までの5段階で評価したところ、「重複なし」の児童の場合、「ない」と評価された児童が30名(9.0%)、「ほとんどない」と評価された児童が65名(19.5%)、「時々ある(他の児童と同じくらい)」と評価された児童が133名(39.8%)、「やや多い」と評価された児童が63名(18.9%)、「多い」と評価された児童が42名(12.6%)、無回答1名(0.3%)であった。一方、「重複あり」の児童では、「ない」と評価された児童が8名(7.0%)、「ほとんどない」と評価された児童が8名(7.0%)、「時々ある(他の子と同じくらい)」と評価された児童が28名(24.3%)、「やや多い」と評価された児童が27名(23.5%)、「多い」と評価された児童が41名(35.7%)、無回答3名(2.6%)であった。

・学習態度に対する指導の現状と課題(自由記述)

学習態度に関する上記3項目において、同年齢の健聴の児童と比較して、おおむね良好である(9点以上)と評価された児童は203名(「重複なし」の児童181名(54.2%)、「重複あり」の児童22名(19.1%))、課題がある(8点以下)と評価された児童は238名(「重複なし」の児童151名(45.2%)、「重複あり」の児童87名(75.7%))であった(図3-10、図3-11)。課題があると指摘された児童のうち、自由記述での回答があったのは、「重複なし」の児童に関する回答が143件、「重複あり」の児童に関する回答が82件であった。

「重複なし」の児童に関する回答のうち、聴覚障害に起因する困難として考えられた項目として、年齢相応の言語力が養われていないために、言語的な指示の理解が困難で、視覚的な手掛かりに頼りがちであるとの意見が挙げられた。また、障害理解も浅く、聞こえにくさに関する意識が乏しく、傾聴態度も育っていないため、学習態度も十分とは言えない様子であった。

「重複あり」の児童に関する回答には、「知的障害と自閉症を併せ有することもあり、集中

力は長く続かないが、好きな学習には離席せずに落ち着いて取り組んでいる」、「てんかん発作の薬の影響で集中することが難しい」などの意見が挙げられていた。このように重複する障害の影響もうかがわれるが、重複する障害種を問わず、一般的には集中力の続かなさという点が挙げられていた。

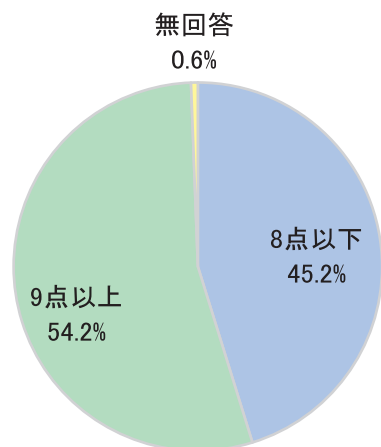


図3-10 学習態度全般の評価（重複なし）

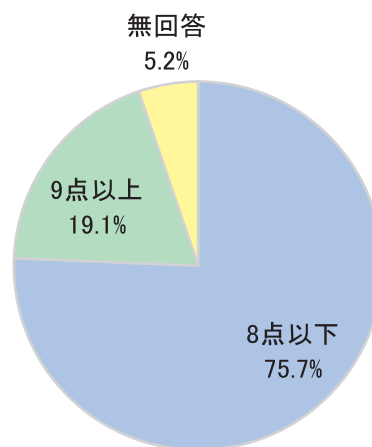


図3-11 学習態度全般の評価（重複あり）

③コミュニケーション能力

・コミュニケーション能力の程度

同年齢の平均的な健聴の児童に比べて、コミュニケーション能力の程度について、「高い」から「低い」までの5段階で評価したところ、「重複なし」の児童では、「高い」と評価された児童が18名（5.4%）、「やや高い」と評価された児童が22名（6.6%）、「同じくらい」と評価された児童が125名（37.4%）、「やや低い」と評価された児童が106名（31.7%）、「低い」と評価された児童が60名（18.0%）、無回答3名（0.9%）であった。一方、「重複あり」の児童の場合、「高い」と評価された児童が0名、「やや高い」と評価された児童が3名（2.6%）、「同じくらい」と評価された児童が16名（13.9%）、「やや低い」と評価された児童が32名（27.8%）、「低い」と評価された児童が58名（50.4%）、無回答6名（5.2%）であった。

・語彙力の程度

同年齢の平均的な健聴の児童に比べて、語彙力の程度について、「高い」から「低い」までの5段階で評価したところ、「重複なし」の児童の場合、「高い」と評価された児童が12名（3.6%）、「やや高い」と評価された児童が27名（8.1%）、「同じくらい」と評価された児童が58名（17.4%）、「やや低い」と評価された児童が91名（27.2%）、「低い」と評価された児童が144名（43.1%）、無回答2名（0.6%）であった。一方、「重複あり」の児童では、「高い」と評価された児童が0名、「やや高い」と評価された児童が3名（2.6%）、「同じくらい」と評価された児童が3名（2.6%）、「やや低い」と評価された児童が24名（20.9%）、「低い」と評価された児童が80名（69.6%）、無回答5名（4.3%）であった。

・話す能力の程度

同年齢の平均的な健聴の児童に比べて、話す能力の程度について、「高い」から「低い」までの5段階で評価したところ、「重複なし」の児童の場合、「高い」と評価された児童が10名

(3.0%)、「やや高い」と評価された児童が34名(10.2%)、「同じくらい」と評価された児童が102名(30.5%)、「やや低い」と評価された児童が115名(34.4%)、「低い」と評価された児童が69名(20.7%)、無回答4名(1.2%)であった。一方、「重複あり」の児童では、「高い」と評価された児童が0名、「やや高い」と評価された児童が3名(2.6%)、「同じくらい」と評価された児童が7名(6.1%)、「やや低い」と評価された児童が33名(28.7%)、「低い」と評価された児童が66名(57.4%)、無回答6名(5.2%)であった。

・コミュニケーションにおける指導の現状と課題(自由記述)

コミュニケーション能力に関する上記3項目において、同年齢の健聴の児童と比較して、おおむね良好である(11点以上)と評価された児童は39名(「重複なし」の児童38名(11.4%)、「重複あり」の児童1名(0.9%))、課題がある(10点以下)と評価された児童は399名(「重複なし」の児童291名(87.1%)、「重複あり」の児童108名(93.9%))であった(図3-12、図3-13)。課題があると指摘された児童のうち、自由記述での回答があったのは、「重複なし」の児童に関する回答が265件、「重複あり」の児童に関する回答が104件であった。

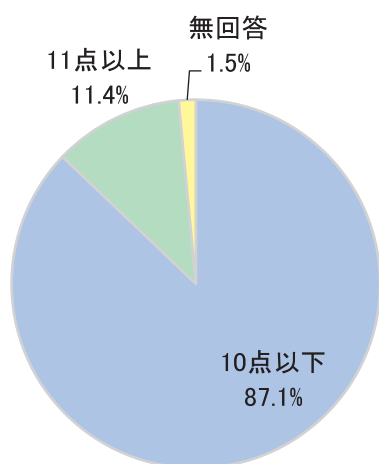


図3-12 コミュニケーション能力全般の評価(重複なし)

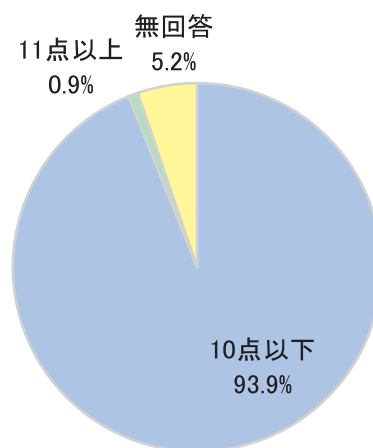


図3-13 コミュニケーション能力全般の評価(重複あり)

「重複なし」の児童に関する回答のうち、聴覚障害に起因する困難として考えられた項目として、語彙力の低さ、文法の弱さなどが挙げられた他、コミュニケーション意欲の低さ、聞き手にとってわかりやすい話し方が身に付いていないなどが挙げられた。

「重複あり」の児童に関する回答には、「フレンドリーで友達との関係は良好。手話を使えない人とのコミュニケーションに課題が多い」、「人とかかわることが好きで、積極的に話しかけているが、話が一方的になりやすい」などの意見が挙げられた。重複障害があっても、コミュニケーション意欲の高い児童がいることがうかがわれるが、年齢相応の適切な語彙の獲得ができていないこと、あるいは相手にとって理解しやすい話し方などに困難があることが示唆された。

④学校生活

・学習への参加状況

教師の質問やクラスメートとの話し合いに対する参加状況について、「多い」から「少ない」までの5段階で評価したところ、「重複なし」の児童の場合、「多い」と評価された児童が77名

(23.1%)、「やや多い」と評価された児童が61名(18.3%)、「同じくらい」と評価された児童が90名(26.9%)、「やや少ない」と評価された児童が77名(23.1%)、「少ない」と評価された児童が26名(7.8%)、無回答3名(0.9%)であった。一方、「重複あり」の児童においては、「多い」と評価された児童が12名(10.4%)、「やや多い」と評価された児童が11名(9.6%)、「同じくらい」と評価された児童が20名(17.4%)、「やや少ない」と評価された児童が29名(25.2%)、「少ない」と評価された児童が38名(33.0%)、無回答5名(4.3%)であった。

・家庭課題への対応状況

持ち物や宿題の持参の程度あるいは提出状況について、「常に持参・提出」から「常に忘れる」までの5段階で評価したところ、「重複なし」の児童では、「常に持参・提出」と評価された児童が114名(34.1%)、「ほとんど持参・提出」と評価された児童が105名(31.4%)、「時々忘れる」と評価された児童が90名(26.9%)、「ほとんど忘れる」と評価された児童が18名(5.4%)、「常に忘れる」と評価された児童が5名(1.5%)、無回答2名(0.6%)であった。一方、「重複あり」の児童の場合、「常に持参・提出」と評価された児童が39名(33.9%)、「ほとんど持参・提出」と評価された児童が30名(26.1%)、「時々忘れる」と評価された児童が30名(26.1%)、「ほとんど忘れる」と評価された児童が10名(8.7%)、「常に忘れる」と評価された児童が0名、無回答6名(5.2%)であった。

・指示に対する遂行能力

教師からの指示に対してどの程度課題を遂行することに困難を示すかについて、「ない」から「多い」までの5段階で評価したところ、「重複なし」の児童では、「ない」と評価された児童が30名(9.0%)、「ほとんどない」と評価された児童が87名(26.0%)、「時々ある」と評価された児童が146名(43.7%)、「やや多い」と評価された児童が48名(14.4%)、「多い」と評価された児童が21名(6.3%)、無回答2名(0.6%)であった。一方、「重複あり」の児童の場合、「ない」と評価された児童が1名(0.9%)、「ほとんどない」と評価された児童が18名(15.7%)、「時々ある」と評価された児童が41名(35.7%)、「やや多い」と評価された児童が32名(27.8%)、「多い」と評価された児童が20名(17.4%)、無回答3名(2.6%)であった。

・生活指導の現状と課題(自由記述)

学校生活に関する上記3項目において、同年齢の健聴の児童と比較して、おおむね良好である(9点以上)と評価された児童は322名(「重複なし」の児童262名(78.4%)、「重複あり」の児童60名(52.2%))、課題がある(8点以下)と評価された児童は116名(「重複なし」の児童69名(20.7%)、「重複あり」の児童47名(40.95%))であった(図3-14、図3-15)。課題があると指摘された児童のうち、自由記述での回答があったのは、「重複なし」の児童に関する回答が75件、「重複あり」の児童に関する回答が52件であった。

「重複なし」の児童に関する回答では、生活リズムが崩れやすい、あるいは提出物等の忘れ物が多いことなどが挙げられていた。また、聴覚障害に起因する困難として考えられた項目として、聞き漏らしが多く、他児の様子から察して行動するなど、言語的な指示が理解できずに適切な行動ができない場合が挙げられていた。

「重複あり」の児童に関する回答には、「放課後デイサービスを利用し、宿題を忘れないようになったが、持ち物は忘れることが多い」、「家庭と連携し、意識的な生活を心掛けるように

取り組んでいる」などの意見が挙げられた。また、低学年の場合には、排せつの自立ができていないことなども挙げられていた。知的障害や発達障害を併せ有することに起因する重点指導項目があることがうかがわれた。

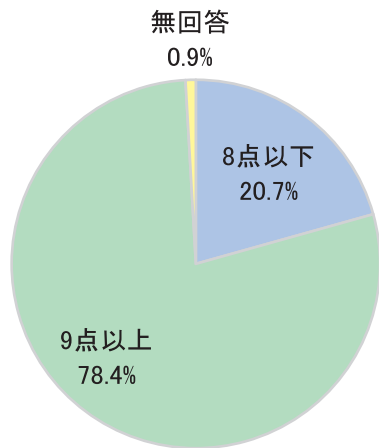


図3-14 学校生活全般の評価（重複なし）

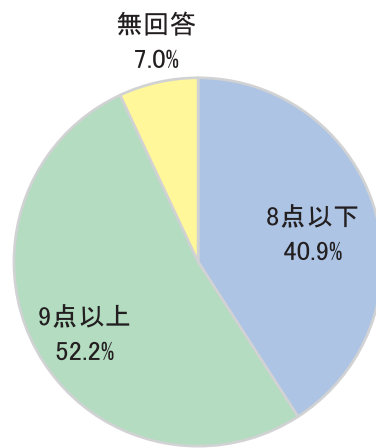


図3-15 学校生活全般の評価（重複あり）

⑤学校での行動

・そぐわない行動の程度

同年齢の平均的な健聴の児童に比べて、学校で場にそぐわない行動や不適切な行動をとることがあるかについて、「ない」から「多い」の5段階で評価したところ、「重複なし」の児童では、「ない」と評価された児童が84名（25.1%）、「ほとんどない」と評価された児童が109名（32.6%）、「時々ある」と評価された児童が91名（27.2%）、「やや多い」と評価された児童が33名（9.9%）、「多い」と評価された児童が16名（4.8%）、無回答1名（0.3%）であった。一方、「重複あり」の児童の場合、「ない」と評価された児童が11名（9.6%）、「ほとんどない」と評価された児童が28名（24.3%）、「時々ある」と評価された児童が25名（21.7%）、「やや多い」と評価された児童が26名（22.6%）、「多い」と評価された児童が21名（18.3%）、無回答4名（3.5%）であった。

・情緒的な課題

同年齢の平均的な健聴の児童に比べて、早い段階でストレスを感じたり、情緒的に落ち着かなくなったりすることがあるかについて、「ない」から「多い」の5段階で評価したところ、「重複なし」の児童では、「ない」と評価された児童が54名（16.2%）、「ほとんどない」と評価された児童が93名（27.8%）、「時々ある」と評価された児童が108名（32.3%）、「やや多い」と評価された児童が56名（16.8%）、「多い」と評価された児童が21名（6.3%）、無回答2名（0.6%）であった。一方、「重複あり」の児童の場合、「ない」と評価された児童が3名（2.6%）、「ほとんどない」と評価された児童が29名（25.2%）、「時々ある」と評価された児童が30名（26.1%）、「やや多い」と評価された児童が25名（21.7%）、「多い」と評価された児童が25名（21.7%）、無回答3名（2.6%）であった。

・友人関係

友人関係について、他の子供たちと良好な関係を維持できているかについて、「非常に良好

である」から「良好ではない」までの5段階で評価したところ、「重複なし」の児童では、「非常に良好である」と評価された児童は52名（15.6%）、「良好である」と評価された児童は152名（45.5%）、「ふつう」と評価された児童は102名（30.5%）、「あまり良好ではない」と評価された児童は22名（6.6%）、「良好ではない」と評価された児童は3名（0.9%）、無回答3名（0.9%）であった。一方、「重複あり」の児童の場合、「非常に良好である」と評価された児童は5名（4.3%）、「良好である」と評価された児童は30名（26.1%）、「ふつう」と評価された児童は60名（52.2%）、「あまり良好ではない」と評価された児童は16名（13.9%）、「良好ではない」と評価された児童は1名（0.9%）、無回答3名（2.6%）であった。

・学校での行動に対する指導の現状と課題（自由記述）

学校での行動に関する上記3項目において、同年齢の健聴の児童と比較して、おおむね良好である（10点以上）と評価された児童は285名（「重複なし」の児童が235名（43.5%）、「重複あり」の児童が50名（70.4%））、課題がある（9点以下）と評価された児童は156名（「重複なし」の児童が95名（53.0%）、「重複あり」の児童が61名（28.4%））であった（図3-16、図3-17）。課題があると指摘された児童のうち、自由記述での回答があったのは、「重複なし」の児童に関する回答が94件、「重複あり」の児童に関する回答が57件であった。

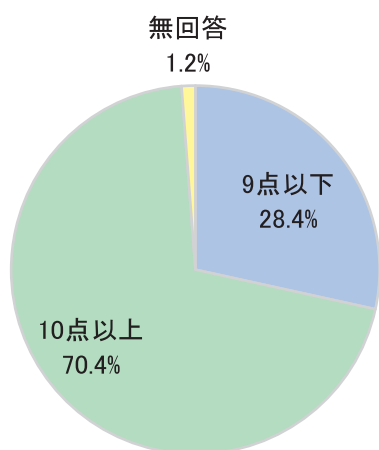


図3-16 行動面全般の評価（重複なし）

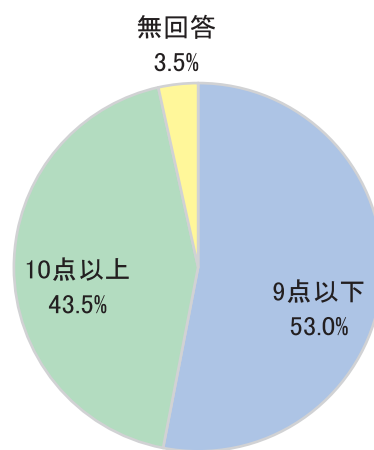


図3-17 行動面全般の評価（重複あり）

「重複なし」の児童に関する回答では、自己本位な行動が多く、他児との関係でトラブルを起こすことが多い様子が見られた。また、障害理解との兼ね合いで、「自分は聞こえている」という思いの強さから、聞き漏らしがあってもそれを認めないなど、聴覚障害に起因する行動上の不適切さも見受けられた。

「重複あり」の児童に関する回答には、「突発的なことへの対応が苦手」、「興味があるものを見つけると、衝動的にそこに向かっていくことがある」などの意見が挙げられた。本項で重複する障害の多くが知的障害や発達障害を併せ有することに起因する行動上の不適切さと考えられた。

II まとめ

1. 教員の属性について

本調査で対象となった小学部担当の教員については、教員経験の平均は15.8年であり、特別支援学校（聴覚障害）での指導経験の平均が9.3年であった。教員経験の約3分の2の期間で特別支援学校（聴覚障害）において指導を行っており、聴覚障害教育に長く携わっている教員であるといえる。一方で、人工内耳に関する研修会で学びたい内容については、人工内耳の基礎研修会を希望する者が57%占めており、聴覚器の解剖生理や人工内耳の仕組みそのもの、さらには日々の使用にあたっての留意点等の、ごく基本的な内容に関する研修会を求めている。そのため、聴覚障害教育に関する理解は深いものの、人工内耳そのものへの理解が十分ではないことがうかがえる。

2. 指導を行っている聴覚障害児童について

まず、上記教員が担当している聴覚障害児童の属性について記す。聴覚障害の診断がなされた時期は2歳までで過半数を占めており、新生児聴覚スクリーニング検査が普及した影響がうかがわれた。また、人工内耳装用時期については、1歳台で17.2%、2歳台で27.5%、3歳台で18.3%、4歳台で10.0%と、ややばらつきがみられた。また、人工内耳手術を実施する前の平均聴力レベルの平均は100dB程度であったが、人工内耳手術後の装用閾値は35dB～40dB程度であり、良好な聞こえがなされているといえる。

聴覚障害児自身が普段使用しているコミュニケーションモードについては、音声は89.3%、手話が83.2%、指文字が69.4%と、音声を主とするトータル・コミュニケーションの形で使用されていることがうかがえるが、学習時の使用コミュニケーションモードについては、音声は66.6%と最も多く、次いで手話が23.8%であった。本調査の対象となった聴覚障害児は、人工内耳を装用し、比較的良好な聞こえがなされているため、特別支援学校（聴覚障害）であっても、手話に頼るのではなく、音声を用いての指導を受けているようであった。

更に、学校歴については、乳幼児教育相談時期に特別支援学校（聴覚障害）を利用していた児童が57.0%、特別支援学校（聴覚障害）幼稚部に通っていた児童が87.1%と、これまでに特別支援学校（聴覚障害）を利用していることが分かった。また、今後の進路については、特別支援学校（聴覚障害）中学部への進学を希望する者が70.3%おり、高い割合で特別支援学校（聴覚障害）での教育を望んでいることが示された。

3. 聴覚障害児童への指導について

聴覚障害児童への指導について、「聴覚活用」、「言語活動」、「学業成績」、「学習態度」、「コミュニケーション能力」、「学校生活」、「学校での行動」の7項目において聞き取りを行ったが、このうち、重複障害の有無に関わらず、「言語活動」、「学業成績」、「コミュニケーション能力」の3項目において特に課題が指摘された。

まず、「言語活動」において、「文法」、「文章理解」、「作文」、「文章構成」の下位項目いずれも課題が指摘されていた。聴覚活用ができていることで、聞こえそのものの課題は少ないが、語彙や文法の力が十分に身に付いていないようであった。

次に、「学業成績」については、同年齢の健聴の児童と比べて学習上の遅れが見られることが指摘されていた。これは、「言語活動」の項目でも指摘されていたように、語彙力の低さや文法の力が弱いことで、国語科の学習が困難になるほか、算数の文章題、理科や社会の教科書の読解にも困難があることが挙げられた。

最後に、「コミュニケーション能力」については、コミュニケーション能力が低く、その理由として語彙力の低さや聞き手にとって分かりやすい話し方が身に付いていないことが挙げられていた。指導上の課題に関する自由記述の中でも、コミュニケーションに関する項目が最も多く挙げられていた。同時に、聴覚活用ができることによって、かえって話者の方に注目をしない、聞き漏らしをしたことに気付けないなど、傾聴態度が身に付いていないことも挙げられており、これらがコミュニケーション能力の低さに関連しているといえる。

また、「重複あり」の児童の場合、「学習態度」、「学校での行動」の2項目において、「重複なし」の児童よりも課題があることが指摘された。これは、本調査で対象とした「重複あり」の児童の多くが、知的障害、発達障害を有することに起因したものと考えられる。自由記述内で述べられた具体的な行動として、離席行動や集中力の欠如などが指摘されており、「重複あり」の児童については重複する障害に合わせた個別的な支援が求められる。

4. 今後の課題

本調査の対象となった聴覚障害児については、人工内耳を装用したことで、これまでの補聴器等装用児に比して聞こえの状態が改善していることがうかがわれた。一方で、これまでの聴覚障害教育において重要視されてきた、言語力や思考力の向上については多くの課題が残されており、人工内耳装用児童に対しても丁寧な指導が必要であることが示唆された。

更に、これまでの聴覚障害教育においてはごく一般的に養われてきた能力として、傾聴態度が挙げられるが、本調査の対象となった人工内耳装用児童については、聞こえがよいためにかえって障害理解が不十分であり、結果として傾聴態度の育成が課題となっている様子がうかがわれた。

なお、本調査では「重複あり」の児童についても回答を得ているが、重複する障害種によって聴覚障害児童の実態が大きく異なること、さらに、児童の年齢段階によって教育的ニーズも異なることから、今後、重複する障害種を分類したうえで、より詳細な実態解明が求められる。